



ショッピングセンターだけでなく、さまざまな機能が集積した賑わい空間「チャオ」。
公共的な位置づけと、出会いや共感を促す役割が今後は望まれる

地域に賑わいを創り出す

現在のチャオは共同店舗、食品スーパー、森林組合を核に、つどいの広場「バンビーニ」やJAの金融店舗、農産物加工所などが併設・隣接しています。周辺には飲食店や「たじまファーム」が並び、また村営巡回バスの発着地にもなっていることから、買い物以外にも多くの住民が訪れるセンター的機能を担っています。脇を流れる天竜川河川敷には、「天の中川河川公園」も開園し、周辺には診療所や村営住宅の建設も計画されており、さまざまな機能をもった複合的な賑わい空間と

チャオを会場に開催されたクラフト展



一方、昭和44年に開業した小渋湖温泉は、村外の宿泊観光客に人気です。四徳の湯を引いた鉱泉の温泉宿は、眼下に小渋溪谷を望む景観と素材が自慢。春は山菜、秋はきのこ、冬は猪鍋と、季節の郷土料理が訪れる人を温かくもてなします。大観光地に恵まれない中川村にとって、地域性にこだわったここにしかない個性の提供が大切になります。

村の賑わい一番地

ショッピングセンターへの村民の強い要望を受けて、平成2(1990)年10月にオープンしたチャオ。「村、農協、商工会の三者がひとつになった、全国にも例をみないショッピングセンター」と、チャオ理事長の知久洋一さん(田島)は開業当時を振り返ります。「村は地場産ふれあいセンター、農協は金融店舗と総合食品スーパー、そして商業者は共同店舗の運営と、それぞれが共存共栄を図りながら地域の豊かな消費生活を担い、今日まで歩んできました」。

そして、今後が期待されています。村の賑わい一番地であるチャオ一帯は、その役割と位置づけの点で新しい可能性を秘めているといえます。人が集い賑わいが創出されていけば、情報発信地として人やものがつながらぬ拠点へと変容していくでしょう。平成20年2月にチャオを会場に開催されたクラフト展は、村内外で活躍する工芸作家たちの仕事ぶりに接し、多くの人が感銘を受けました。商業空間と作家たちの仕事がつながったことで、「誘客」以上の何かが生まれたのです。

地域の人々が「その場所」を使って活動することで、「その場所」

地域資源を活かして

昭和46(1971)年開業の別館いさわは、地域密着の飲食店として歩

は公共的な領域になるといわれます。公共空間としての位置づけと、人と人が出会い、共感を促す拠点としての役割が、これからのチャオに期待されます。



「おたまじゃくし」の原料になる酒米を栽培する飯沼の棚田

「中川産」を活かして

地域に物語をつくる

飯沼地区の住民有志でつくる「飯沼農業活性化研究会」は、棚田を地区の財産として維持しよう、地道な活動を続けてきました。平成16(2004)年1月、清酒・今錦で知られる米澤酒造(株)に、同研究会から相談が持ち込まれました。「棚田でつくる酒米(美山錦)を使って酒を造ってほしい」との申し入れに、同社では翌平成17年から製造に着手し、特別純米酒「おたまじゃくし」として商品化しました。

ネーミングの由来は成長。おたまじゃくしのように酒も時間とともに変化し、1月のおり酒以降、4種の味を楽しむことができます。「酒米の品質が良く、やや辛口で芳醇な香りの、飲みやすい酒に仕上がった」と同社の米澤博文社長は、当時を振り返ります。

「これからは、大豆生産者と私たちのような加工業者、販売業者が一定の地域内で連携していかないと、消費につながらないと思います」と。吉沢社長はきつかけをこう語ります。地産地消は生産し、加工し、販売し、そして消費するまでの循環システムです。この仕組みがきちんと確立して初めて、地産地消は地域経済に重要な役割を果たすものと考えられます。「豆腐で生産から消費までのシステムが確立しました。これを他のものに広げていきたい」

と、次の目標を見据えています。昭和52(1977)年に現在地に工場を立地し、30年余の歴史を村に刻んだ(株)アイシン製作所。創業当初は従業員に対し、「仕事は確実だが時間がかりすぎる」など、トヨタのものづくりとのギャップを感じたといいます。同社では、主に雇用面で地域に大きな役割を果たしてきました。工業製品を造り出荷する製造業は、「外貨」を獲得し地域経済を活性化する上で重要です。今後も地域にあつてその役割が期待されます。



すいれい豆腐が製造する中川産大豆100%の豆腐